

## 信 行 要 文 ② 第七回 法華講夏期講習会 第二期

皆さん、おはようございます。

この夏期講習会は従来、十期にわたって行われておりましたが、既に御承知のとおり本年度から形態が変わりまして、まず三期に分けて行い、そして第四期には青年部を主体として講習会を行うことになりました。

さらに、今年からは講師、幹部、活動家の方々を中心に御出席いただくことになりましたので、今日お越しの皆さんもそういった方々だと思います。そこで、今回の講義をお受けになって御自分の支部に帰りましたならば、是非、広く一般の講員の方々にも今回学んだことをお伝えいただきまして、目標達成のために力強く前進していただきたいと思いますので、その点をまず心得ていただきたいと思います。

さて私の講義についてですが、平成十八年に「折伏要文」についてお話をしまして、翌十九年に「功德要文」について、一昨年(平成二十年)には「信行要文」についてお話をさせていただきました。そして、去年は「七万五千名大結集総会」もありましたので、夏期講習会はお休みいたしました。

そのうち、平成十八年の「折伏要文」については、配布したテキストの最後まで講義を終えたので、第十期にはもう一度テキストの初めからお話ししたのですが、十九年の「功德要文」と二十年の「信行要文」は、テキストの最後まで進まずに途中で終わってしまいました。そこで今年は、それらでやり残したテキストにある御文をまとめて系年順に編集し、これを今年のテキストとしてお話ししていこうと考えております。

さて、前置きが長くなりましたけれども、前回はテキストの二ページの4『妙法曼陀羅供養事』までで終わってしまいました。最後に少し時間がありましたので、5の『当体義抄』についてごく簡単にお話ししたのですが、それはきちんとした講義になっておりませんので、本日はこの5『当体義抄』の御文について改めてお話ししていきたいと思います。

### 5 当体義抄

所詮<sup>しよせん</sup>妙法蓮華の当体とは、法華經を信ずる日蓮が弟子檀那<sup>だんな</sup>等の父母所生<sup>しよしよ</sup>の肉身<sup>これ</sup>是なり。

(御書六九四ノ九行目)

ここにあります「父母所生<sup>しよしよ</sup>の肉身」とは、父母から生を受けた、我々のありのままの姿のことです。ですから、この御文の意味は、荒凡夫である我々人間が妙法を信じたときには、ありのま

まで尊極なる妙法蓮華の当体と顕れるということでもあります。

これについては『阿仏房御書』のなかにも、

「末法に入って法華經たも なんによを持つ男女ほかのすがたより外には宝塔も しか きせんなきなり。若し然れば貴賤上下をえらばず、南無妙法蓮華經ととなふるものは、我が身宝塔にして、我が身又多宝如来なり。妙法蓮華經より外に宝塔なきなり。法華經の題目宝塔なり、宝塔又南無妙法蓮華經なり」(御書七九二頁)

と仰せられております。「宝塔」とは、ここにありますように南無妙法蓮華經のことであります。すなわち三大秘法の妙法を受持した人は皆、等しく宝塔であり、多宝如来という仏様であると仰せられているのであります。

しかも、ここでは「貴賤上下をえらばず」と仰せでありますから、たとえ高貴な家柄でなくても、あるいは貧しい人であっても、妙法信受の功德によって必ず妙法蓮華經の当体と顕れるということでもあります。これを反対に考えますと、いかなる高貴な家柄の者であったとしても、あるいは社会的に高い地位の人であったとしても、また富める人であったとしても、妙法蓮華經と唱えなければ成仏することはできない、ということになるのです。文字どおり「貴賤上下をえらばず」で、我々の信心によって成仏・不成仏が決まるのである、このように信心が大事であるということをおっしゃっているのであります。

またさらに、この『当体義抄』の御文について詳しく申し上げますと、テキストに載せた御文のあとに有名な御文がありまして、

「正直に方便を捨てただ但法華經を信じ、南無妙法蓮華經と唱ふる人は、煩惱・業・苦の三道、法身・般若・解脱しん ほんにや げだつの三徳と転じて三観・三諦即一心さんがん さんたいに顕はれ、其の人の所住の処は常寂光土なり。能居・所居・身土・色心、俱体俱用の無作三身、本門寿量の当体蓮華の仏とは、日蓮が弟子檀那等の中の事なり。是即ち法華の当体、自在神力の顕はす所の功能なり。敢へて之を疑ふべからず、之を疑ふべからず」(同 六九四頁)

と仰せになっております。これを解りやすく申し上げますと、正直に方便の教えである爾前権教、邪義邪宗の教えを捨てて、ただ法華經を信じて一心に南無妙法蓮華經と唱える人は、煩惱・業・苦の三道、すなわち見思惑・塵沙惑・無明惑といった煩惱も、あるいは五逆・十悪・四重等の諸々の悪業も、また苦果の依身たる五陰・十二入等の苦も、仏に具わる三種の徳相である法身・般若・解脱へと転ずることができる、と仰せられているのであります。

この三徳のうちの「法身」とは、仏様が証得せられたところの真理です。次の「般若」とは、その真理を悟る智慧のことです。そして「解脱」とは、法身・般若の二徳が一如となって、生死の苦しみから脱却した状態であります。すなわち苦しみそくぼくの束縛から離れて、自由になることを言うのであります。このように、現世の苦悩から解放されて絶対自由の境地に達することを、煩惱・業・苦の三道が、法身・般若・解脱の三徳へと転ずると言うのであります。

続いて「三観・三諦即一心に顕はれ」とは、三諦は境、三観は智にして、ただ法華經を信じて南無妙法蓮華經と唱えるときには、本地難思の境智の妙法を即、一心に悟り顕して、本門寿量の

当体の蓮華仏となるのであります。

そして「其の人の所住の処は常寂光土なり」と仰せですが、「其の人」とは三道即三徳の妙人にして、依報と正報に分けますと正報に当たります。また「所住の処」以下は依報となりまして、「所住の処」の四字は依報のなかの因を表し、「常寂光土」の四字は依報のなかの果を表しております。すなわち三道即三徳の妙人の住する処は、依正不二の原理によって、そのまま常寂光土となると仰せなのであります。

次の「能居・所居」の「能居」とは居住する主体であります。これは仏・菩薩・二乗等のことを言い、「所居とはその仏・菩薩等が住する国土を言うのです。つまり、依報のことです。

また「身土」とは、まず「身」とは身体でありますから、衆生の一身のことです。「土」とは、その身が存在する場所、いわゆる国土を言うのであります。したがって、身は正報、土は依報となります。そして「色心」とは色法と心法のことでありまして、色法は肉体や物質などの目に見える物および外形的に表すことのできる物を言い、心法は心の<sup>はたら</sup>用き、精神および一切法に内在する性質を言うわけです。

この御文について、日寛上人は『当体義抄文段』において、

「今は文底の意に依り、無作三身の依正に約して之を<sup>い</sup>積するなり。謂わく、『能居・所居』は是れ無作<sup>い</sup>応身の依正なり、例せば妙楽が『即ち本の<sup>い</sup>応身の所居の土』と云うが如し。『身土』と言うは無作法身の依正なり。例せば妙楽が『即ち是れ<sup>びるしやな</sup>毘盧遮那の身土の相』と云うが如し。『色心』とは無作<sup>しき</sup>報身の依正なり。十法界を心とするは報身なり云云。報身は色を以て所依と為し、心を報身とする故なり。此の無作三身の所依を寂光土と云うなり」(御書文段 六二三)

と仰せられています。

すなわち「能居・所居」は無作<sup>い</sup>応身の依正に約し、「身土」は無作法身の依正に約し、「色心」は無作<sup>しき</sup>報身の依正に約されて、無作三身の御当体たる御本仏大聖人御自身の上に<sup>い</sup>拝せられることを御指南あそばされているのであります。

次に「俱体俱用」とは、<sup>たい ゆう とも</sup>体も用も俱に具わっていることを言い、体は本体、用は用きのことです。つまり、理体事用や体本用末などの、体と用を差別した見地に立つのではなくして、本体もその用きも即にあらず不即にあらず、さらに融にあらず不融にあらず、同にあらず異にあらず、不思議な関係において共に欠けることなく具わっていることで、<sup>くきょう</sup>究竟不可思議の体用を俱体俱用とするわけです。これを「俱体俱用の無作三身」と言い、久遠元初の本仏である無作三身如来のことを指すのであります。

次の「本門寿量の当体蓮華の仏」とは、妙法の当体すなわち、本門寿量の妙法蓮華経の仏のことです。つまり、一心に南無妙法蓮華経と唱える人は、三道を即三徳と<sup>い</sup>転じ、三観の智も三諦の境もその行者の一身の上に<sup>い</sup>顕れて、行者の住処はそのまま常寂光土となり、住まうところの行者の身も、住まわれる国土も、精神も肉体もそのままの徳用が<sup>い</sup>顕れ、自然に法報<sup>い</sup>応三身如来の徳が具わって、本門寿量の当体蓮華の仏と成ると仰せられているのであります。

少し難しい言葉が続きましたけれども、つまり我々が正報であり、国土が依報でありますから、

正報である我々がしっかりと成仏の相を現ずることによって、依報たる国土世間も必ず成仏の相を示していくということをおっしゃっているのです。

しかし、これはあくまでも「日蓮が弟子檀那等の中」に限られているわけでありまして、本因下種の南無妙法蓮華經の教え以外では、いくら信じ行じても本門寿量の当体蓮華仏とは成れないのであります。その成仏のための源は何かと言え、まさに大御本尊に具わる「自在神力の顕はす所の功能」によるからでありまして、よって「敢へて之を疑ふべからず、之を疑ふべからず」と、無疑日信の信心が肝要であると仰せられているのであります。

なお、これについて『法華玄義』の三卷には、

「此の煩惱に因<sup>よ</sup>って、此の業を起し此の苦を得」(学林版玄義会本上 四七九頁)

とあります。つまり煩惱があつて、それが様々な悪業を作り、それによって苦しむということが、限りなく繰り返される様を「三輪」と言います。これは煩惱と業と苦という三つをぐるぐると繰り返し、脱却できない状態のことです。日蓮正宗の信心をしていない人々は、まさに皆この状態なのです。まず煩惱が悪業の因縁を作り、悪業の因縁が苦しみの因縁を招き寄せる、すると苦しみがまた煩惱の因縁を作るのであります。そして再び煩惱が悪業の因縁を作り、また苦しみとなりという具合に、ぐるぐると繰り返すのであります。

ただし一念三千の理法によれば、この三道と三徳とは、実は共に我々の一念に具わっているのです。つまり本来、一体不二であつて全く別のものではないのです。三道によって三徳があるということは、同じく『法華玄義』に、

「法身に迷うて苦道と為す。苦道を離れて別に法身有るに不<sup>あ</sup>ず」(同 八五〇頁)

と積されておりますように、三道を離れて三徳はないのであります。三道の本体は三徳なのですが、現実にはなかなか三徳として顕れないのであります。故に、三道を断尽して三徳を顕すのではなくして、妙法に値<sup>あ</sup>い、南無妙法蓮華經と唱えることによって初めて、三道を転じて三徳を成ずることになるのです。先の『当体義抄』の御文にも「法身・般若・解脱の三徳と転じて」とおっしゃっているのですから、私達が正しい縁に値う、つまり御本尊様に値い奉るということが、いかに大事なかが解るのであります。

「父母所生の肉身」たる我々が、無疑日信の信に立つてこの御本尊様を信じ、文底の南無妙法蓮華經を一生懸命に持つ、それによって我々はそのまます妙法の当体蓮華仏と成るとおっしゃっているのですから、テキストの御文はたいへん短いわけではありますが、これは非常に大事なことであります。

南無妙法蓮華經と唱えることによって、我々は別の人格になってしまうとか、別の物体になってしまうわけではありません。我々自身は同じ人間であります。しかし、三道が三徳に転じて当体蓮華仏と顕れるというところに、大聖人様の仏法のすばらしさがあるのです。例えばパソコンの操作のように、だめなものはオールクリアしてしまうのではないのです。我々はそのままでいいのです。ただ御本尊を信じていくなかで、必ず三道即三徳と顕れるのでありますから、一生懸命に信心に励むということが大事なことであります。

次に6の『法華行者値難事』であります。

## 6 法華行者値難事

追って申す。竜樹・天親は共に千部の論師なり。但権大乘を申べて法華經をば心に存して口に吐きたまはず。天台・伝教は之を宣べて本門の本尊と四菩薩・戒壇・南無妙法蓮華經の五字と、之を残したまふ。所詮、一には仏授与したまはざるが故に、二には時機未熟の故なり。今既に時来たれり、四菩薩出現したまはんか。日蓮此の事先づ之を知りぬ。西王母の先相には青鳥、客人の来相には鴉鵲是なり。各々我が弟子たらん者は深く此の由を存ぜよ。設ひ身命に及ぶとも退転すること莫れ。(御書七二〇〇一六行目)

この御書は文永十一(一二七四)年の正月に、大聖人様が佐渡の一谷から富木常忍をはじめとする門下一同に与えられた御書であります。内容としては、法華經の行者の値う難を示して、弟子達がいかなる難に値おうとも、退転することなく信行に励むようにと激励されているのであります。

この御書のなかで、竜樹・天親はただ権大乘を述べて法華經を弘めず、また天台・伝教は法華經を述べたが、三大秘法の南無妙法蓮華經は説かなかつた。これは、一つに仏の付嘱がなかつたからであり、二つに時機未熟のためであつたということを述べられています。

また、釈尊・竜樹・天親・天台・伝教等の受けた難を示して、末法の法華經の行者は、これら先師の難をはるかにしのぐ大難を受けるとして、大聖人様がお受けになった難が釈尊・天台・伝教等の難よりもさらに大きな難であることを実証して、まさに日蓮大聖人が末法の法華經の行者であることを明かしているのであります。

法華經の行者とは、文底觀心の辺から拝すれば、まさに仏様ということであり、末法の仏様の代名詞のようなものであります。

特に大聖人様は、正法時代の竜樹・天親、あるいは像法時代の天台・伝教が明確には述べなかつたところの、そしてまた末法のために残された御法門として「本門の本尊と四菩薩・戒壇・南無妙法蓮華經の五字」を挙げられておりますが、これらは三大秘法の名目であります。この三大秘法の内容につきましては、もとより大聖人様の御胸中に懐かれていたと拝されますが、その具体的な御教示、特に戒壇ということについて明確に仰せられ、三大秘法が整足して明かされたのは本書が最初であろうと思われまふ。

文永十(一二七三)年四月の『觀心本尊抄』には、

「事行の南無妙法蓮華經の五字並びに本門の本尊」(御書 六六〇〇)

と、題目と本尊については述べられておりますけれども、そこにはまだ戒壇という名目は明かされておられません。また『開目抄』にも、三大秘法の名目はまだ整足して顕されておられません。しかるに本抄の追伸において「本門の本尊と四菩薩・戒壇・南無妙法蓮華經の五字」と、初めて戒壇の名

目が本尊・題目と並んで示され、三大秘法が整足された形をもって明かされているのであります。

このあと『法華取要抄』において、

「問うて云はく、如来滅後二千余年に竜樹・天親・天台・伝教の残したまへる所の秘法何物ぞや。答へて曰く、本門の本尊と戒壇と題目の五字となり」(同 七三六頁)

と明かされまして、追伸ではなく本文中に初めて三大秘法の名目が明かされているわけでありませんが、それより先、御書中の一番初めに示されたのがこの『法華行者値難事』であります。

まず「竜樹・天親は共に千部の論師なり。但権大乘を申べて法華経をば心に存して口に吐きたまはず翫あそ」とあります。「千部の論師」の「論」とは、経の意を論議して明らかにしたもののことで、したがって「千部の論師」とは、そういう論を千部も造って、仏教の法義を解説し弘めた人師のことでありまして、一般的には竜樹や天親を指すわけでありまして、

竜樹という方はインドの大乗の論師でありまして、大乘思想の大成者で八宗の祖と言われております。元々はバラモンの出身でありまして、初めに小乗教を習ったのちに大乘教を学び、当時盛んになりつつあった大乘教の経典を注釈して理論的な基礎を与え、大乘思想の振興に大きく貢献したと言われております。

竜樹の思想は中観派とも称せられますが、この方の著書には『中観論』や『大智度論』『十住毘婆沙論』『十二門論』などたくさんあり、これが大乘思想の根幹をなすものであるために、のちの世に八宗の祖と言われるのであります。八宗とは俱舎・成実・律・法相・三論・華嚴・真言・天台のことで、これらの祖師と崇められているわけです。

ここに「但権大乘を申べて」とありますけれども、権大乘の「権」とは仮りという意味で、権りの大乗という意味であります。つまり、実大乘を説くための方便の教えで、華嚴経や般若経などの諸経がこれに当たります。

続いて「法華経をば心に存して口に吐きたまはず」とあります。「内鑑冷然」という言葉を聞いたことがあると思いますが、これは内心の悟りは鏡のように冷ややかに澄んでいて絶対平等の境地に止住するが、外面には時に適った法を説くということでありまして、『摩訶止観』に、

「天親・竜樹、内鑑冷然たり、外には時の宜しきに適う」(学林版止観会本中 三一五頁)

とありますように、いにしへの竜樹・天親の両師は、内心では法華経が一念三千の法門を説き、諸経中最第一であることを知っていたけれども、それを外に向かつては説かず、その時代の民衆の機根に合った権りの大乗教、つまり権大乘を弘通したのであります。

すなわち竜樹は『大智度論』のなかで、

「般若経で説く般若波羅蜜は秘密の法ではなく、二乗作仏を説く法華経が最勝のお経である」ということをおっしゃっているのです。この「秘密の法」とは、最極の法という意味であります。これによって、竜樹が法華経に説かれる一念三千の法門を内心には覚知していたと推測されるのであります。

また、天親の『法華論』のなかには、

「仏はただ一仏乗の教え、すなわち法華経をもって衆生を教化する。さきに種々の方便を説い

たのも、ことごとく法華經を説こうとするためである」  
とおっしゃっているのです。このことから、天親もまた内鑑冷然されていたことが解るのであります。

このように、竜樹・天観は内鑑冷然して、末法の大法を心のなかではすべて御存じであったということをおっしゃっているのであります。

次に天台・伝教ですが、「天台・伝教は之をこれの宣べて本門の本尊と四菩薩・戒壇・南無妙法蓮華經の五字と、之を残したまふ」とおっしゃっております。この御文は、三大秘法の名目が初めて示された御文であります、そのなかでまず「本門の本尊と四菩薩」と仰せなのであります。

「四菩薩」とは、御承知のように法華經涌出品に説かれる地涌六万恒河沙の菩薩の上首たる、上行・無辺行・淨行・安立行あんりゆうの四菩薩のことでありまして、如来神力品において釈尊から結要付嘱を受け、末法の弘通を託された大乘の大菩薩であります。大聖人様はその四菩薩の上首・上行菩薩の再誕として末法に御出現あそばされましたが、それはあくまで外用のお姿であって、内証しよじんび深秘の上かう言えば久遠元初の御本仏であります。つまり、ここで仰せの四菩薩とは、末法に出現されてあらゆる大難を忍び、本門の本尊と戒壇と題目を能く弘められるところの能弘能忍のうぐのうにんのお方、すなわち宗祖日蓮大聖人様のことをお示しあそばされているのです。

これを詳しく申しますと、「本門の本尊と四菩薩」と同様の表現は、『観心本尊抄』のなかにも、「本門寿量品の本尊並びに四大菩薩」(御書 六五四ぎ)とあるのです。これについて日寛上人の『観心本尊抄文段』には、

「『本門寿量品の本尊』とは人即法の本尊を示しており、『並びに四大菩薩』とは法即人の本尊を示している」(御書文段 二四六ぎ取意)

とあります。つまり、本尊と四菩薩とは別々のことを言っているのではないのです。まさに人即法の上から「本門寿量品の本尊」「本門の本尊」と仰せられ、法即人の上から「四大菩薩」とおっしゃっているのです。ですから、この『法華行者値難事』において示されている「本門の本尊と四菩薩」との文意は、『観心本尊抄』と同様に所弘しよぐの法として本門の本尊を示され、また能弘にんの人として四菩薩を示されるという深い意味の上から、このように仰せになっていらっしゃるのです。このことは混同せず、明確に覚えておく必要があります。

次に「所詮しよせん、一には仏授与ほとけじゆよしたまはざるが故に、二には時機未熟すでの故なり。今既に時来たれり、四菩薩出現したまはんか。日蓮此の事先まづ之を知りぬ」とあります。

法華經の涌出品において、他方の国土から来集した迹化の菩薩達が、滅後における娑婆世界の弘經を申し出られます。それに対し釈尊は、

「止みね、善男子なんだち。汝等が此の經を護持せんことを須いじ。所以は何ん。我が娑婆世界に、自おのずから六万恒河沙等の菩薩摩訶薩まかさつ有り。一一の菩薩に各六万恒河沙の眷属いちいち有り。是の諸人等、能く我が滅後に於て、護持し、誦誦し、広く此の經を説かん」(法華經 四〇八ぎ)

と、その申し出を止めて、大地の底から上行菩薩達の四菩薩を上首とする六万恒河沙の本化地涌の菩薩達を呼び出して如来寿量品を説いたのちに、如来神力品において法華經の肝要を「四

句の要法」に括<sup>く</sup>って付嘱し、地涌の菩薩達に末法の弘経を託されたのです。すなわち釈尊は迹化他方の菩薩ではなく、地涌上行菩薩に対して末法に弘通すべき法を付嘱したわけであります。つまり、竜樹・天親・天台・伝教等の論師等は、釈尊より末法弘通のための付嘱を受けていない人達でありますから、このように「仏授与したまはざるが故に」とあるのです。

また「二には時機未熟の故なり」というのは、法華経の肝心たる妙法蓮華経は末法の衆生のための要法であって、天台・伝教等の正像時代のための要法ではないのであります。つまり時が至らなかったために、天台・伝教は妙法蓮華経を弘められなかったのであります。

まさに時ということが大事でありまして、大聖人様は「今既に時来たれり、四菩薩出現したまはんか。日蓮此の事先づ之を知りぬ」と仰せられて、末法が四菩薩出現の時であると仰せになっているのであります。もちろんここに仰せの四菩薩も、先程述べたように、あくまでも外用のお姿であって、内証深秘の上から拝せば、久遠元初の仏様ということになるのであります。

次に「西王母<sup>せいおうぼ</sup>の先相<sup>せいしやう</sup>には青鳥<sup>せいじやう</sup>、客人<sup>かんじやく</sup>の来相<sup>らいしやう</sup>には鴛鴦<sup>こんらん</sup>是なり」とあります。この「西王母」というのは中国の古代神話上の女神でありまして、西方の崑崙山<sup>こんろん</sup>に住んでおり、あるお経のなかでは半人半獣とも言われているようでもありますけれども、のちに美化されて描かれるようになった人でもあります。この女神は不老長寿をもって知られており、周の穆王<sup>ぼく</sup>が遠征の途上に会ったと伝えられ、また漢の武帝が不老不死の仙桃<sup>あずか</sup>を与<sup>たま</sup>ったとされています。この神話のなかに出てくる西王母が降りてくる時には、必ず青い鳥が現れると言われているのです。また、客人が来る時には「鴛鴦」すなわち、かささぎがやかましく鳴き立てると言われているわけです。つまり、大聖人様が受けられた大難をもって先相とし、今、末法こそ四菩薩出現の時であるとおっしゃっているのであります。

次に「各々我が弟子たらん者は深く此<sup>よし</sup>の由<sup>よし</sup>を存<sup>たど</sup>ぜよ。設<sup>な</sup>ひ身命<sup>な</sup>に及<sup>な</sup>ぶとも退<sup>な</sup>転<sup>な</sup>すること莫<sup>な</sup>れ」とあります。この御書は、先程も言いましたけれども、法華経の行者が値う大難を示し、弟子達に対して、いかなる難に値おうとも退転することなく信行に励むように激励されているわけであります。なかんずく釈尊・竜樹・天親・天台・伝教などの受けた難を示して、末法の法華経の行者すなわち、大聖人はこれらの先師の難をはるかにしのぐ大難を受けているとして、大聖人が受けた難が釈尊・天台・伝教などの難よりもさらに大きな難であることを実証し、大聖人様が末法の法華経の行者であることを明かしているわけです。こうした諸難に際し、大聖人は弟子檀那一同に対して「設ひ身命に及ぶとも退転すること莫れ」と、難を乗り越える信心こそ最も肝要であると厳しく仰せられているのであります。

よく皆さんもお聞きと思いますが、火の信心と水の信心ということがあります。火の如き信心というのは、いつときは非常に盛んではあるけれども、燃え尽きてしまいますとそれで終わり、いつの間にか、だんだんと信心の情熱が失われてくるような形を言うわけです。それに対して水の信心とは、滔<sup>とうとう</sup>々と流れてやむことなき水の如く、ずっといつまでもいつまでも続けていく、そういう信心のことです。

日蓮正宗の信心というものは、一つには法華経は難信難解と言われている教えでありますか



ら、信じ難く解し難いのであります。なぜ難信難解なのかと言いますと、法華経は隨他意の教えではなくして、隨自意の教えなるが故であります。つまり仏様が本来、我々に説こうとされたところの教えであるから、どうしても難信難解になるのです。

その信じ難く解し難しという信心を貫こうとするなかには、様々な難に値うことがあるわけですが、この難を乗り越えるところに、実は大きな功德が存するわけです。このことが解っていないと、すぐに難に負けてしまうのです。

「胸突き八丁」という言葉がありますけれども、登りのきつい難所で断念してしまうような信心では頂上にたどり着けません。苦しければ苦しいほど、それを乗り越えていくのが当家の信心の姿です。このことを、厳しく「設ひ身命に及ぶとも退転すること莫れ」とおっしゃっているのです。

我々は凡夫ですから、信心をしても色々な苦難があると思います。けれども、それを乗り越えなければ、本当の勝利の味わいは絶対につかめないのです。苦しい時に、そこで負けない信心をしていかなければなりません。一つの山坂を乗り越えていく一番大事なところで、けっして我々はへこたれないで、たとえ身命に及ぶとも強盛に信心を貫いていく、折伏をしていくということが肝心だと、このようにおっしゃっているわけであります。

それでは、次の『法華取要抄』を拝読します。

## 7 法華取要抄

問うて曰く、法華経は誰人の為に之を説くや。答へて曰く、方便品より人記品に至るまでの八品に二意有り。上より下に向かって次第に之を読めば第一は菩薩、第二は二乗、第三は凡夫なり。安樂行より勸持・提婆・宝塔・法師と逆次に之を読めば滅後の衆生を以て本と為す。在世の衆生は傍なり。滅後を以て之を論ずれば正法一千年・像法一千年は傍なり。末法を以て正と為す。末法の中には日蓮を以て正と為すなり。問うて曰く、其の証拠如何。答へて曰く「況滅度後」の文是なり。疑って云はく、日蓮を正と為す正文如何。答へて云はく「諸の無智の人の、悪口罵詈等し、及び刀杖を加ふる者有らん」等云云。(御書七三四〇二行目)

この『法華取要抄』は文永十一(一二七四)年五月二十四日に、大聖人様が身延から富木常忍に与えられた御書であり、非常に大事な御法門が説かれております。すなわち、法華経の要中の要である三大秘法の南無妙法蓮華経が末法弘通の本尊であることを、この御書のなかで明かされているのであります。

まず題号の『法華取要抄』のうち「法華」の二字は、釈尊一代の所説中、爾前の経を捨てて法華経のみを用いることを示しております。それから「取要」の二字は、広・略・要の法華経のなか、広・略の法華経を捨てて肝要のみを取ることを示しているのです。

御文の内容は、大きく三段に分けることができます。最初に一代諸経を教法・教主の人法両面

から勝劣を論じ、法華経が最勝の教えであることを明かされます。二番目には、法華経、特に如来寿量品は釈尊滅後、末法の日蓮大聖人のために説かれたものであるとして、法華経の眼目は末法にあることを示されており。三つ目には、末法流布の大法は三大秘法の南無妙法蓮華経であることを明かされ、広・略を捨てて要の法華経である妙法蓮華経の五字を取る所以を示されています。

また併せて、当時の天変地天などの現証を挙げられ、これらは正法の行者である大聖人様を誹謗したためであって、末法広宣流布のための先相であると説かれているのであります。

この『法華取要抄』で説かれていることをひとことと言いますと、法華経はなんのために説かれたのかということであり。まず一つは在世の衆生、つまり釈尊の時代の人達のために説かれたということです。もう一つは滅後のためです。滅後とは釈尊が亡くなったあとの人のためということで、その滅後のなかでも末法のため、末法のなかでも大聖人様のために説かれたのが法華経だとおっしゃっているのです。つまり、末法に大聖人様が御出現せられて、三大秘法の南無妙法蓮華経を建立せられることを予証せられているのが法華経であるというのが、この『法華取要抄』の主旨であり、これを強調しておられるのであります。

テキストに載せた御文は、それをおっしゃっているなかの一文であります。まず初めに「問うて曰く、法華経は誰人の為に之を説くや。答へて曰く、方便品より人記品に至るまでの八品に二意有り。上より下に向かって次第に之を読めば第一は菩薩、第二は二乗、第三は凡夫なり」とあります。これ以下の文が、先程言いましたなかの第二番目に当たる、この教えを被るところの時機を明かされているのでありまして、そのうちの法華経の迹門について述べられているところであり。ます。

法華経は迹門と本門とに分かれます。法華経の迹門というのは、序品第一から安樂行品第十四まででありますけれども、これを序・正・流通の三段に分けますと、最初の序品第一の一品が序分となります。それから正宗分は方便品からの八品、つまり方便品、譬喩品、信解品、薬草喩品、授記品、化城喩品、五百弟子受記品、授学無学人記品の八品です。そして流通分が法師品、見宝塔品、提婆達多品、勧持品、安樂行品であり、このように序・正・流通の三段に分かれるのであります。

このうちの正宗分の八品について、「上より下に向かって次第に之を読めば」とは、上からということですから、方便品から順番に読むという意味です。方便品から授学無学人記品に向かって順番に読んだ場合、法華経は「第一は菩薩、第二は二乗、第三は凡夫」のために説かれたものとなるとおっしゃっております。

ところが、ここで少し問題になることがあるのです。それは、法華経迹門の性格はなんであるかということなのです。つまり法華経迹門の肝心は二乗作仏ではないかということなのです。

法華経は何が尊いかというと、二つのことが挙げられます。つまり二乗作仏と久遠実成が説かれている点であり、そのうち二乗作仏は迹門で説かれ、久遠実成は本門で説かれております。この二つが、ほかのお経には全くない、法華経の勝れたところだと言われておるわけであり。ます。

ですから、迹門の内容は二乗作仏が主意であって、御書に「第一は菩薩」とあるのは当たらないのではないかと、疑問に思われる方がいらっしゃるかと思いますが、これについては「文の次第」と「義の傍正」という二つの立て分けがあるのであります。

すなわち、文の次第に<sup>じゆん</sup>准じれば「第一は菩薩、第二は二乗、第三は凡夫」となるわけでありませう。これは方便品のなかに、

「菩薩<sup>こ</sup>是の法を聞いて 疑網<sup>ぎもみならず</sup>皆已に除く 千二百の羅漢<sup>らかん</sup> 悉く亦<sup>ことごと</sup>亦<sup>また</sup>當<sup>まさ</sup>に作仏<sup>さぶつ</sup>すべし」(法華經 一二四<sup>ぎ</sup>)

とあり、初めに「菩薩是の法を聞いて 疑網皆已に除く」とありますので、これはまず最初に菩薩が悟られたということになるのです。そのあとに「千二百の羅漢 悉く亦當に作仏すべし」とあり、千二百の羅漢すなわち二乗は、この菩薩に次いで作仏したということが説かれているわけでありませう。つまり得益の次第・順番によって、菩薩が二乗よりも先に法華經によって悟りを得たと説かれておりますので、そこから「第一は菩薩」となるわけですね。

また「第二は二乗」とあるのは、先程も言いましたとおり、迹門正宗分の八品の全体、また迹門それ自体が二乗の得道を示されているわけですから、菩薩が得道されたその次に二乗が作仏したのであります。

さらに「第三は凡夫」とあります。迹門の正宗分が終わったあと流通分に入りますと、最初の法師品において様々な衆生の授記が挙げられておりまして、そこに凡夫の作仏が説かれているのであります。このように、法華經の得益の順番、すなわち文の次第から言えば、第一が菩薩、第二が二乗、第三が凡夫となるのです。

この文の次第に対しまして、もう一つに「義の傍正」ということがあるのです。これは『観心本尊抄』に、

「二乗を以て正と為し、菩薩・凡夫を以て傍<sup>ぼう</sup>と為す」(御書 六五六<sup>ぎ</sup>)

と示されるように、義の上から言えば、法華經の迹門八品を説かれたのは二乗が主意であるということですね。

二乗は過去四十余年の間、絶対に成仏できないと言われてきたのでありますが、法華經に至って初めて、その二乗も成仏することが説かれたわけでありませう。すなわち爾前の諸經では自悟、自分自身の解脱に執着して利他に欠けていた二乗というのは、仏様やみんなからも嫌われて、永久に成仏できないと仏様から<sup>だんか</sup>弾呵されました。それが、法華經の迹門で一念三千の法門、つまりあらゆる衆生が成仏できるという原理が説かれて初めて、この二乗にも成仏の記別が与えられ、成仏が保証せられたのであります。

これは、三種の声聞に対して三週の説法が説かれて、それぞれが記別を与えられたのです。三種というのは上根・中根・下根であり、これらの声聞に対して、法説周・譬説周・因縁説周の三週の説法が説かれたのであります。

法説周では妙法の実理、十如实相の法門を聞いて、上根の声聞である舍利弗のみが得道しました。この法説周は方便品と譬喩品の前半にわたって説かれております。

二番目の譬説周は譬えを説かれたのであります。有名なものに「三車火宅の譬え」というのがあ  
るでしょう。この三車火宅の譬えなどの譬喩・譬え話を聞いて、中根の声聞である迦葉、目犍連、  
迦旃延、須菩提の四大声聞が得道したわけです。これが譬喩品の後半から授記品までの四品に  
わたって説かれております。

三番目の因縁説周では、過去の大通智勝仏以来の因縁が説かれて、下根の声聞である富樓  
那達が得道するわけです。これは化城喩品から人記品までの三品にわたって説かれました。

このようにして二乗は成仏したのでありますが、この二乗の成仏ということが法華經の大きな特  
徴なのであります。この二乗作仏の上から十界互具し、百界千如一念三千という法門が初めて成  
立するわけでありますから、二乗作仏ということは非常に大切でありまして、法華經迹門正宗分の  
方便品から人記品に至る八品の正意は、まさに二乗作仏にあるのです。『観心本尊抄』の「二乗  
を以て正と為し、菩薩・凡夫を以て傍と為す」という御文の意味もここにあるわけで、これが義の傍  
正であります。

だから、文の次第から言えば第一は菩薩となりますが、義の傍正から言うと第一は二乗である  
と、このようになるわけです。

しかし、さらにもう一步、突っ込んで考えてみますと、法華經迹門正宗の八品を順次に読めば、  
たしかに文の次第あるいは義の傍正ということが言われていますが、いずれにしても、これは在世  
の衆生のためであるということに変わりはないわけです。そういう意味では、法華經の第一の目的  
は、釈尊在世の衆生のために説かれたということが言えるのであります。

次に「安樂行より勸持・提婆・宝塔・法師と逆次に之を読めば滅後の衆生を以て本と為す。在  
世の衆生は傍なり」とありますように、逆に迹門を後ろのほうの流通分から読んでみると、今度は  
在世の衆生のためには傍となり、本来は末法の衆生のためとなるのです。つまり在世が傍、滅後  
が正となり、変わってくるわけです。

さらに「滅後を以て之を論ずれば正法一千年・像法一千年は傍なり。末法を以て正と為す。末  
法の中には日蓮を以て正と為すなり」、滅後のなかでは正像二千年が傍で、末法が正意であり、  
その末法のなかでも大聖人様のために説かれたというのが正意であるとおっしゃっているのだ  
です。つまり結論から言うと、久遠元初の御本仏が末法に御出現あそばされて三大秘法の仏法を  
御建立あそばされる、このことを予証するために説かれたのが法華經であるということです。

これが一番肝心なところです。当家の御法門を学ぶときには色々な学び方があるわけですが  
けれども、きちんとした結論を先に持って、そこから御書を拝し、法華經を拝していくということが肝  
要なのであります。

極端な例を言いますと、御書を拝読するにも法華經を拝読するにも、まず日蓮大聖人様こそ末  
法の御本仏である、久遠元初の御本仏であるということをしつかり頭に入れて読んでいけばよく解  
るのです。その上から御書を読み、またその御書を基にして今度は法華經を読んでいけばよく解  
るのであり、さらにその法華經を基に一代諸經を読んでいくとよく解るのであります。

しかしその逆に、膨大な一代諸經を読んでいって、法華經にたどり着こうなどというのは無理な

話です。我々凡夫には、なかなかできません。だから先に結論をしっかりと持って御書を拝読していく。そうすると、御書の内容もお経の内容も、必ず一目瞭然になるのです。

この御文もそのとおりであります。末法における大聖人様のために説かれたのが法華経であると、このように仰せられているわけですから、今度はそのことを理解した上から読んでいけばいいのです。

次には「問うて曰く、其の証拠如何」との質問があります。それではその証拠はどういうことなのか、との意であります。

それに対して「答へて曰く『況滅度後』の文是なり」と仰せですが、この「『況滅度後』の文」とは法師品のなかの御文であります。すなわち法師品のなかに、

「而も此の経は、如来の現在すら、猶怨嫉多し。況んや滅度の後をや」(法華経 三二六)と説かれています。これは皆さん方も、よく聞いていらっしゃることでしょう。すなわち、法華経を弘める者には釈尊在世ですら大難があった。いわんや滅度ののちに法華経を弘める者には当然、数々の大難があるという意味であります。

この「滅度の後」は正像末の三時にわたりますけれども、正意は別して末法を指しております。つまり、釈尊在世よりも滅後の正法時代のほうが怨嫉が多い。その正法時代よりも像法時代は、さらに怨嫉が増える。そして末法の初めに入りますと、正法時代・像法時代よりもさらに多く、まさに未曾有の大怨嫉が起きるといふことでもあります。

その一つの表れとして、例えば勸持品のなかに未来の法華経の弘通について、八十万億那由他の菩薩方によって二十行の偈文をもって予言されております。この「二十行の偈」というのは、法華経の虚空会において、八十万億那由他の菩薩が仏の滅後に三類の強敵、つまり俗衆増上慢・道門増上慢・僭聖増上慢の大難に耐えて法華経を弘通することを、異口同音に誓った文であります。

末法今時においては、大聖人様は『開目抄』のなかで、

「日蓮一人これをよめり」(御書 五四一)

とおっしゃっています。日蓮大聖人は正法弘通に際して、三類の強敵による大難を説くこの偈文を身口意の三業にわたって読まれて、「大難四力度、小難数を知らず」と言われるように、伊豆伊東の流罪、小松原の法難、竜の口の法難など、身命に及ぶ未曾有の大難を受けながら、末法の御本仏としての境地を開顕あそばされたのであります。

法華経をこのように身体でお読みになったのは、大聖人様ただお一人だけであります。天台・伝教は末法の人ではありませんし、末法においては大聖人様以外にお読みになった方はだれもいない。だから「日蓮一人これをよめり」とおっしゃっているのです。

このように、「況滅度後」とある御文の上から見ますと、法華経の流通分の内容を明らかに実践した者はだれかといえば、まさに滅後末法の大聖人様ただお一人だけだということが明確になってくるのであります。

したがって、流通分から立ち返って正宗分を見たときに、この日蓮大聖人の弘通による「況滅

度後」の大難の実践こそが、まさに末法において「日蓮を以て正と為す」<sup>ゆえん</sup>所以であることが、よくお解りになるのではないかと思います。

次に「疑って云はく、日蓮を正と為す正文如何」とあります。これは、法華經迹門は滅後末法のため、末法のなかでも大聖人様のために説かれたものだという正文はあるのか、という質問です。

これに対して「答へて云はく『諸<sup>もろもろ</sup>の無智<sup>しよもん</sup>の人の、悪口罵詈<sup>あつくめり</sup>等し、及び刀杖<sup>とうじょう</sup>を加ふる者有らん』等云云」と、勸持品の「二十行の偈」のなかの御文を挙げられて、その正文としているわけでありす。つまり、大聖人様は法華經を弘めることによって無智の人から悪口罵詈せられ、また刀杖の難を受けられました。刀杖というのは刀と杖のことであり、すなわち文永元(一二六四)年十一月の小松原における東条景信の襲撃、あるいは文永八(一二七一)年九月十二日の竜の口の<sup>くび</sup>頸の座の大難など、まさに身命に及ぶ大難によって法華經の經文をことごとく実証あそばされたのであります。しかも、

「仏法日本国に渡って七百余年、いまだ是程<sup>これほど</sup>に法華經の故に諸人に悪<sup>にく</sup>まれたる者なし。月氏・漢土にもありともきこえず、又あるべしともおぼへず」(同 八二〇頁)

と、仏法史上、大聖人様ただお一人だけがこのような大難に値われたのであり、ほかにはだれもいないと仰せであります。さらに「月氏・漢土にもありともきこえず、又あるべしともおぼへず」とあり、インドにも中国にも「あるべしともおぼへず」と明言あそばされているのであります。

つまり、これらの様々な法華經の実践は大聖人以外には全くなく、まさしくこの經文は大聖人様の身に宛てて説かれたところのものであるということが、この上からも明確になるわけであります。要するに「日蓮を以て正と為す」ということを、この勸持品の御文こそが証明しているとおっしゃっているのです。

先程の「あるべしともおぼへず」とのお言葉は、大聖人様が法華經弘通のために末法に出現した御本仏であるという、その御境地の意味を込めておっしゃっており、これが明確な証拠なのであります。

ただいま拝読いたしたように、法華經はだれのために説かれたかといえ、迹門は初めから順に読めば在世の人々のためでありますけれども、後ろの流通分から逆次に振り返って正宗分を読めば、正像末のなかには末法、末法のなかには日蓮大聖人様のために説かれていることになるのであります。

さて、今までの話は迹門の上から、順次に読むか逆次に読むかを論じていることなのですが、本門はいかにということがあります。テキストには載せませんでした、この御文のあとに、

「問うて曰く、本門の心は如何。答へて曰く、本門に於て二の心有り。一には涌出品<sup>ゆじゅつぽん</sup>の略開近<sup>りやっかいこん</sup>頭遠<sup>けんのん</sup>は前四味並びに迹門の諸衆をして脱せしめんが為なり。二には涌出品<sup>どうしゅうしやうぎ</sup>の動執生疑より一半並びに寿量品・分別功德品の半品、已上一品二半を広開近頭遠と名づく。一向に滅後の為なり(中略)問うて曰く、誰人の為に広開近頭遠の寿量品を演説するや。答へて曰く、寿量品の一品二半は始めより終はりに至るまで<sup>まさ</sup>正しく滅後の衆生の為なり。滅後の中には末法今時の日蓮等が為なり」(同 七三四頁)

とおっしゃっているのです。つまり本門の心をもってしても、法華経は正像末のなかには末法、末法のなかには大聖人様のために説かれたと仰せなのです。

これが結論でありますけれども、まず「本門に於て二の心有り」とおっしゃっております。本門においては二つの心、つまり略開近顕遠と広開近顕遠の二つがある。このうち略開近顕遠は在世の衆生のため、広開近顕遠は滅後のためだとおっしゃっているのです。

そこで「開近顕遠」とはどういうことかと言いますと、これは「近きを開いて遠きを顕す」ということで皆様も既に御存じのことと思います。つまり仏様の遠寿を顕すことなのですが、この開近顕遠に略開近顕遠と広開近顕遠の二つがあるということなのです。

まず涌出品におきまして、地涌の菩薩の出現を見て一座の大衆は大いに驚くわけですが、特にみろく弥勒菩薩はこのような姿を見て、

「昔より未だ曾て見ざる所なり 願わくはりようそくそん両足尊説きたまえ 是れ何れの所より来れる 何の因縁を以てあつまか集れる」(法華経 四一四㊦)

と、この菩薩方はいったいどこから来たのか、あるいはまた、なんの因縁をもってここに集まったのかと釈尊に質問するわけです。これに答えて釈尊は、

「爾その時に世尊、是の勅を説き已おわって、弥勒菩薩に告げたまわく」(同 四一九㊦)

といて説き始められ、そして、

「我今実語われいまじつごを説く汝等なんだち一心に信ぜよ」(同 四二二㊦)

と仰せられました。この「実語」というのは真実の言葉ということで、「私はこれから真実を説きます」ということを述べて、「汝等一心に信ぜよ」とおっしゃり、さらに、

「我久遠このかたより来 是等これらの衆を教化せり」(同㊦)

と述べられたのであります。つまり、この地涌の菩薩達は私が久遠より教化してきた者達だと言われたのでありますが、これはどういうことかという、仏様の命が永遠であることを弟子に約して、ほぼ明かされているわけです。このあと広開近顕遠を説かれる部分では、御自分に約して「我れは久遠の昔に成仏した」ということをおっしゃるのだけれども、この時はまだ御自分のことに約しておらず、弟子に約して「今、ここに出現した地涌の菩薩達は、私が昔に教化した者達だよ」とおっしゃっているのです。要するに、仏様の遠寿をほぼ示されたわけで、「ほぼ」というのは「略」ということですので、これを略開近顕遠と言うのであります。

次に広開近顕遠というのは、寿量品に至り、

「然るに善男子、我実に成仏してよりこのかた已来、無量無辺百千万億那由他劫なり」(同 四二九㊦)

と説かれます。つまり涌出品における略開近顕遠は御自身ではなく弟子に約されて略示あそばされたものでありますが、これに対して寿量品の広開近顕遠は「我実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由他劫なり」と御自身の身に約して、広く久遠五百塵点劫の開顕を明かされているのであります。そこに大きな違いが出てくるわけでありす。

そこで前に戻って、この略開近顕遠について『法華取要抄』の御文を拝しますと、「涌出品の

略開近顕遠は前四味並びに迹門の諸衆をして脱せしめんが為なり」と仰せになっております。あるいはまた、このあとの御文においては、

「略開近顕遠に来至して、華嚴よりの大菩薩・二乗・大梵天・帝釈・日・月・四天・竜王等位妙覺に隣り又妙覺の位に入るなり」(御書 七三四)

と明かされています。すなわち、在世の衆生は略開近顕遠に来たって得脱をしたのです。つまり釈尊が久遠の命であることをほぼ示された時に、在世の衆生は得脱したと示されているわけであり

ます。そこで大切なことは、天台の所立と大聖人様の所立の違いであります。天台は、涌出品の略開近顕遠によって動執生疑するとされ、動執生疑の文を略開近顕遠に属せしめて、寿量品に至り、広開近顕遠をもって断疑生信、疑いを断じて信を生じたのだと解釈しているのであります。

動執生疑の文とは、涌出品の、

「爾の時に弥勒菩薩摩訶薩、及び無数の諸の菩薩等、心に疑惑を生じ、未曾有なりと怪んで、是の念を作さく、云何ぞ世尊、少時の間に於て、是の如き無量無辺阿僧祇の諸の大菩薩を教化して、阿耨多羅三藐三菩提に住せしめたまえる」(法華経 四二二)

の部分であります。釈尊が地涌の菩薩を指して、私が久遠より教化してきたと言ったことに対して、なぜこんな少時の間に、これらの多くの菩薩方を教化して成仏せしめることができたのだろうかという疑問が生じてくる、これが動執生疑です。この動執生疑の文を起因として広開近顕遠が説かれてくるのであります。

この動執生疑を天台は略開近顕遠に属せしめて、略開近顕遠の時には在世の衆生は断疑生信することができなかつたけれども、寿量品の広開近顕遠に来たって初めて断疑生信したと見るわけです。

これが本門脱益三段において正宗分となる一品二半の配立でありまして、大聖人様の文底下種三段と天台の本門脱益三段との違いであります。正宗分の一品二半の配立について、天台は略開近顕遠に始まるとし、大聖人様は略開近顕遠のあとの動執生疑より始まると仰せなのです。

一品二半というのは、御承知のとおり、一品は寿量品、それから二半というのは、涌出品第十五の後半の半品と分別功德品第十七の前半の半品をいい、合わせて一品二半となるわけです。問題になるのは、涌出品のどこからを一品二半の半とするかということでありまして、略開近顕遠の部分からを一品二半とするのが天台の解釈であり、大聖人様は略開近顕遠ではなく、動執生疑の文からを一品二半とするわけであり

ます。天台は略開近顕遠によって動執生疑したと説きますが、大聖人様は略開近顕遠によって在世の衆生は断疑生信し、すべからく得脱したと説かれます。したがって本門の正宗分である肝心要の一品二半は、動執生疑からの一品二半であり、これは滅後の衆生のためであると仰せられているのであります。だから、大聖人様は動執生疑を広開近顕遠に属せしめ、涌出品の動執生疑よりの半品に寿量品一品と分別功德品の前半の半品、これを「広開近顕遠の一品二半」と仰せられているのです。



これに対して天台は、涌出品の半品とは略開近顕遠からであると言っているわけですが、なぜこのような相違があるかと言いますと、先程、少し申し上げましたけれども、天台の配立は在世脱益のため、大聖人様の配立は末法下種のためだからなのです。

そこで、この点をさらに申し上げるならば、略開近顕遠とは何かということがあります。これを大聖人様の仏法の立場から考えてみますと、日寛上人は『法華取要抄文段』において寿量品における義に両辺ありとして、一つには文上の寿量品、二つには内証の寿量品、この二つのことを挙げておられます。

すなわち『法華取要抄文段』に、

「一には文上の寿量品、是れ則ち本果久成の遠本を説き顕わす。此の顕本の説を聞いて、在世一段の衆生は皆眞実の断惑を究むるなり。是れを天台は『広開近顕遠、断惑生信』と名づくるなり。二には内証の寿量品、是れ則ち久遠元初の名の遠本を説き顕わす。蓮祖は是れを広開近顕遠と名づくるなり。此れは是れ天台未弘の法門なり。是の故に今文の意は、文上の寿量品、天台の『広開近顕遠、断惑生信』を以て、仍退けて涌出品の略開近顕遠に属し、通じて断惑生信と為す。故に『涌出品の略開近顕遠は前四味並びに迹門の諸衆をして脱せしめんが為なり』と云うなり。次に内証の寿量品を以て広開近顕遠と名づく。此れを以て正しく『一向に滅後の為』とするなり」(御書文段 五一二)

とおっしゃっております。

つまり寿量品の顕本において、文上の寿量品と文底内証の寿量品という二つがあるということです。まず文上の寿量品は本果久成の遠本を顕し、この本果久成の遠本を聞いて在世の衆生は皆、惑を断つことができたのであります。そして二つには内証の寿量品で、これは久遠元初の名の遠本を顕すわけです。つまり文上は本果久成、文底内証は久遠元初の遠本を顕しているのであります。文上の寿量品は在世の衆生のために説かれたのであり、これに対して内証の寿量品は滅後末法のために示されたものなのです。つまり、久遠元初の妙法を説き顕すのは滅後のためということでもあります。

そうしますと、先程言ったように、本門に略開近顕遠と広開近顕遠がありますが、内証の寿量品の辺から見ると、在世の衆生は略開近顕遠を聞いた時点ですべて成仏したのであり、動執生疑からあとは滅後のためだということなのであります。このように、文上の寿量品は本果久成、五百塵点劫を表すのですが、久遠元初より望めば、そこには五百塵点劫という限界がある、つまり五百塵点劫には久遠無始無終にわたっての常住性が存しないわけであり、ですから文底より拝するならば、さらに一重立ち入ったところの五百塵点劫成道修得の法、つまり久遠元初の本因本果俱時の妙法とその本地を顕さなければならないということになってくるのであります。

そこで大聖人様は『総勘文抄』のなかで、

「釈迦如来五百塵点劫の当初、凡夫にて御坐せし時、我が身は地水火風空なりと知ろしめして即座に悟りを開きたまひき。後に化他の為に世々番々に出世成道し、在々処々に八相作仏し、王宮に誕生し、樹下に成道して始めて仏に成る様を衆生に見知らしめ、四十余年に方便

の教を儲け衆生を誘引す」(御書 一四一九㊟)

と示され、大聖人様の開近顕遠とは久遠元初を顕すことであると仰せられております。

また、日寛上人は『法華取要抄文段』のなかで、

「開近顕遠に亦両辺有り。若し文上に准またぜば、近日始成の近迹を開して本果久成の遠本を顕わす、故に開近顕遠と云うなり。若し文底に拠よらば、本果・中間・今日の近迹を開して久遠元初なおの名字の遠本を顕わす、故に開近顕遠と云うなり。問う、何ぞ本果を以て仍近迹と名づくるや。答う、是れ久遠元初の自受用身に望むるが故なり。此れは是れ内証の寿量品の顕本の意なり云云」(御書文段 五一三㊟)

とおっしゃっているのです。

つまり、文上の顕本は始成正覚を打ち破って本果久成の遠本を開顕するも、文底の顕本はその本果をも含めて「中間・今日の近迹」なりと打ち破って、久遠元初を打ち立てているのであります。故に、この二つの顕本の差において、天台所立の略開近顕遠、動執生疑、広開近顕遠、断疑生信を全部ひっくるめて、大聖人様は文底の立場から略開近顕遠なりと仰せられている次第であります。

したがって、その上において大聖人様の意から言うならば、この内証の寿量品、久遠元初の顕本を広開近顕遠と言うのであります。ですから『木因妙抄』には、

「脱益の法華は本迹共に迹なり」(御書 一六七八㊟)

という有名な言葉があります。釈尊の在世脱益の教えというものは、本門であっても迹門であっても、すべてこれは迹門だと断じられているのです。それと同じように、大聖人様の久遠元初の開顕である広開近顕遠から見るならば、すなわち文底から望むならば、天台の略開近顕遠から広開近顕遠に至るすべては略開近顕遠に属するのであると、このように断じられているのであります。これを同じく『法華取要抄文段』に、

「問う、天台の広開近顕遠を以て、蓮師、何ぞ略開近顕遠と名づくるや。答う、天台の広開近顕遠は但本果久成の遠本を顕わし、未だ久遠元初ただの名字の遠本を顕わさず。故に蓮祖の広開近顕遠に望むるに、實に是れ略開近顕遠なり。故に退しりぞいて涌出品の略開に属するなり」(御書文段 五一二㊟)

と仰せられているわけであります。

したがって当抄には、広開近顕遠はだれのためのものかと言えば「一向に滅後の為」であり、その滅後のなかにも「末法今時の日蓮等が為なり」と仰せなのであります。そうすると法華経は、一往は在世の衆生のために説かれたと言えますが、再往はことごとく大聖人様のために説かれたお経であるということが明確になってくるのであります。つまり、大聖人様が末法に御出現あそばされて、文底深秘の三大秘法の大御本尊を御建立あそばされる、このことをお説きになったのが法華経だということになる次第であります。

時間の関係上、急いでお話をしてしまい、途中、解らなかつた点もあつたかも知れませんけれ

ども、このところは非常に大事な御法門であります。難しくて解らない点があったら、お帰りになってから御住職によく聞いてみてください。細かく指導してくれると思います。

さて、今、宗門は<sup>あ</sup>挙げて平成二十七年の法華講員五十パーセント増に向かって前進をしております。去年の「七万五千名大結集総会」の影響もあり、信心が非常に<sup>いっけつ</sup>一結しまして、本年度はお正月からすごい勢いで折伏が進んでおります。

皆さん方の支部も頑張っていると思います。既に目標を達成した支部も何支部かありまして、今はその支部は目標の二百パーセント、三百パーセントを目指して、どんどん折伏を進めております。そういうわけで、ここにいる皆さんもしっかりと折伏に励んでもらいたいと思います。

ここで一つだけ申し上げたいのは、宗門が平成二十七年に向けて掲げた目標は「法華講員五十パーセント増」であるということでもあります。五十パーセント増やすということですから、現在の人数の五十パーセントの人数を折伏すればよいということではないのです。例えば、御自分の支部は百人いるとします。すると「そうか、五十パーセント増だから、五十人の折伏をすればよいのだな」ということとは違うのです。

申し上げている意味は、法華講員を五十パーセント増やそうということです。したがって、皆さん方も御経験があると思いますが、折伏なさってもついてこない方もいらっしゃるし、またはお年寄りや亡くなる方など自然減もありますから、その分もきちんと考えて折伏しないとだめなのです。ですから、単に五十パーセントの折伏をやればよいということではありませんので、このところを心得ておいてもらいたいと思います。

それから、今も言ったとおり、折伏をするだけでなくして、今度はその方々を育ててもらいたい、育成してもらいたいと思います。どういうふうに育成するかというと、簡単なのです。折伏された人が、次の人を折伏できるように育てるのが育成なのです。そういうことです。

ですから、折伏と育成というのは、両方とも実は化他行なのです。唱題をする、勤行をするというのは自行です。それに対し、折伏することと育てるということは化他行ですから一緒なのです。だから、これを別々に考えないで、折伏したらその人が次の人を折伏できるような、そういう法華講員に育て上げていただきたいと思います。

本日、ここにお集まりの方々は、講頭さんをはじめ幹部の方、活動家の中心の方々でありますから、そういうお心得を持って、平成二十七年に向かって大前進をしていただきたいと思います。

少し時間が過ぎましたが、本日はこれを持ちまして講義を終了いたします。